

令和2年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 優秀賞(事務次官賞)

「 知ることの大切さ 」

愛媛県 松山市立中島中学校 3年 矢野 主税

一昨年の7月7日。私はこの日起こった出来事を忘れることはないだろう。土砂で茶色くなった海、ふさがれた道路、山から落ちてきた岩。一瞬にして、穏やかだった私の日常が変わってしまった。

7月6日。この日は朝から警報が出ていたため、学校が休みになった。寮を出て、自分の住む島に着く午後1時頃には、道路に大きな水たまりができるほどの激しい雨が降っていた。7月7日の午前1時、突然大きなサイレンが鳴る。寝ていた私も飛び起きるほどだった。近くで土砂災害が起きて人家が巻き込まれたとのことだ。途端に私は怖くなった。自分も巻き込まれるかもしれない、という焦りと恐怖心が募り、眠れなくなってしまった。午前2時半、避難所に行くことになった。前日から降っていた雨は勢いを増し、今までに体験したことがないくらい大粒の雨が降っていた。水路を流れる水は溢れかえっていて、恐怖を感じながら避難所に移動した。避難所は、家からすぐ近くのところにあつたため、すばやく避難ができた。着くと、よく知っている島の人たちや友だちと合流できたので一安心した。午前7時には雨もおさまっていたが、外を見るとそこには私が知っている島の姿はなかった。

私はこの災害を経験し、今後このような被害を起こさないためには、どうすればよいかを考えた。

1つ目は、災害情報に敏感になることだ。近年、避難勧告に関するガイドラインが訂正され、警戒レベル等の情報が提示されるようになった。災害時、とるべき行動も示され、分かりやすい。今後は出された情報を見てすぐに判断し、行動できるように日ごろから意識していこうと思う。

2つ目は、避難への危機意識を高めることだ。今回の災害では、情報が出てから避難しようと動く人が少なかった。実際に、私が避難した午前2時半の時点で、避難していた島民は半分もいなかった。夜中なのもあっただろうが、これは少なすぎる。私の祖父も「大丈夫だ。」と言って、避難するのが遅かった。災害を経験して以降、島民の災害に対する危機意識は高まったと感じている。今年の豪雨の時も、多くの島民が早くから避難をしてきていた。「これくらい大丈夫。」という意識を捨て、「もしかしたら危ないかもしれない。」という意識に変えていきたい。

3つ目は、土砂災害についての知識を深めることだ。私自身、災害に対しては昔から敏感で、島の防災状況についてはよくわかっていたつもりだった。しかし、今回の災害を通して、初めて知ったことがたくさんあった。災害の中でも土砂災害についての詳しい知識は知らなかったし、島の地形や、島で起こりやすい土砂災害については全く知らなかった。例えば、土砂災害には前触れがある。土石流なら、川の中でゴロゴロという音がしたり、地鳴りがしたりする。地すべりなら、池の水が減ったり、樹木がざわつき、裂ける音がしたりする。知識があれば、避難指示前にとるべき行動を事前に予測でき、それなりの対策もできる。被害を最小限に留めることができる。その他にも松山市が作っている防災マップ等をしっかりと活用し、日頃から自分の住む地域の危険箇所を確認しておくようにしたい。

あれから2年が経過した。私が住む怒和島は、島民だけでなく、公の支援や、多くのボランティアの方々の手によって元の姿を取り戻しつつある。作り上げてきたものが壊れるのは一瞬だ。当たり前にあった美しい海は一瞬にして泥水へ、青々としたみかんの木が植わっていた山は土砂で茶色に変わってしまった。あの悲惨な景色を、私は忘れることができない。作り上げてきたものは時間をかけて取り戻すこともできるが、どうにもならないものもある。それは、人の命だ。私は、この災害で大切な友人をなくしてしまった。土砂災害は、一瞬にして私たちの大切なものを奪ってしまう。

近年、大規模災害が多くなってきている。これから地球に何がおきるのか、正確に予測することは困難だ。しかし、過去の事例に学び、対策を立てていくことはできる。私は将来、生まれ育った怒和島で暮らしたい。だからこそ、過去に自分が「もっとこうすべきだった。」と後悔したことをこれからは活かせるよう、今後も学んで、正しい知識を発信していきたいと思う。